



Title	トルキスタンの地歴教科書（タシュケント、1918年）を読む
Author(s)	小松, 久男
Citation	日本中央アジア学会報, 18, 1-25
Issue Date	2022-07-31
DOI	10.14943/jacas.18.1
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/91632">http://hdl.handle.net/2115/91632</a>
Type	article
File Information	JB18_001komatsu.pdf



[Instructions for use](#)

## トルキスタンの地歴教科書(タシュケント、1918年)を読む

小松 久男

### はじめに

近代トルキスタンのムスリム知識人はどのような歴史を構想していたのか、これは興味深いテーマだが、これまであまり検討されてこなかったように思われる。ロシアによるコーカンド・ハン国の併合、そしてブハラ・アミール国とヒヴァ・ハン国の保護国化は、伝統的な王朝史という歴史叙述に大きな変化をもたらした。ブハラのアフマド・ダーニシュ(1827-97)やサーミー(1838/39-1907/08)のように著者による批判的な評価を表明したマンギト朝史もあれば、ターイブ(1830-1905)による人物・事件史もあり、とりわけコーカンド・ハン国の滅亡後にはさまざまなフェルガナ史が書かれている。これらは大きな変化と言えるが、著者たちの認識はなお諸ハン国の枠組みにとらわれていたようにみえる<sup>(1)</sup>。しかし、ロシアの1905年革命以後、ムスリムの定期刊行物が普及をはじめ、ジャディード知識人を中心に民族的な自覚が生まれるとともに、より広くトルキスタンという歴史空間を意識した歴史叙述への関心が高まってゆく。これは一面では、ロシアによる征服からおよそ半世紀を経てトルキスタンに一定の社会経済的、文化的な一体性が生まれた結果ともいえる。加えて、新方式学校<sup>(2)</sup>の普及とともに歴史や地理の教科書の必要性も説かれるようになった。しかし、第一次世界大戦からロシア革命へという激動の中で具体的な著作はなかなか生まれなかった。管見の限り、その最初の例はムフタル・バキルの『歴史と地理からみたトルキスタン地方』(タシュケント、1918年、176頁)である<sup>(3)</sup>。本稿は、この著作の内容を紹介・検討することによりトルキスタン史の構想と射程を明らかにすることを目的とする。なお彼の活動に関する先行研究として、筆者はウズベキスタンの研究者マディヤロワの研究 [Мадьярова 2014] の

(1) こうした歴史叙述の動向については、[Allworth 1990: 122-130; Khalid 2004: 127-137; Бабаджанов 2010: 29-50]などを参照。

(2) 新方式学校については[小松 1996: 54-68; Khalid 1998: 155-183; 磯貝 2014; Ross 2020: 140-169]などを参照。

(3) 本書のコピーは20年ほど前に Stéphane A. Dudoignon 氏から恵贈を受けた。ここに記して感謝したい。

ほかを確認していない。

本稿では、まず背景として1910年代に始まるトルキスタン史への関心を概観し、ついで著者バキルの経歴と活動をたどったうえで、本教科書の紹介と検討に入ることにしたい。

## 1. トルキスタン史への関心

トルキスタン史への関心が語られるようになるのは1910年代のことである。その背景の一つには1911-14年に展開された民族名称サルトをめぐる論争があった。ロシア当局がトルキスタンのムスリム定住民に与えたサルトという公式名称ははたして適切なのか、いや適切ではない、そもそもわれわれはこの名を知らない、こうした問題提起から生まれた論争は、トルキスタンにとどまらず広くロシア・ムスリムの言説空間でも数々の議論をよんだ。これはわれわれは何者かというアイデンティティに関わる議論に他ならないが、論者は必然的に歴史のなかに論拠を求めることになった。歴史の探究は『クタドゥグ・ビリグ』や『バーブル・ナーマ』、ナヴァーイーの作品のような古典から悠久のテュルクの歴史に及んだ。論争自体は第一次世界大戦を前にして終息を迎えたが、歴史への関心はその後むしろ高まったように思われる<sup>(4)</sup>。

その一例はサマルカンドのジャディード知識人ハジ・ムイーン(1883-1942)が1913年初め『シューラー』に寄稿した「トルキスタンの忠告と要請」に見られる。サマルカンドの興亡を事例に、トルキスタンの再生と復興をよびかけた著者は、かつての文明と繁栄、テュルクの父祖たちの功績を描いた『テュルク・トルキスタン史』の編纂をよびかけていた[Haji Mu'in 1913: 10]。こうした関心をさらに進めて、近代教育における民族史の重要性という観点から具体的な問題提起を行ったのが、タタール人ジャーナリストのヌーシルヴァーン・ヤウシェフ(1886?-1917)であった<sup>(5)</sup>。1914年6月『トルキスタンの声』紙に寄稿した「トルキスタン史」で、彼はこう述べている。

民族の学校で読まれるための民族史教科書の必要性は周知のことである。どの国民も民族も学校ではまず自分たちの歴史を学ばせている。初等学校の目的とは、母語を教えて自分たちの文学に親しませ、幼い児童の柔らかな心に民族と祖国への愛を育むこと、また民族の言語、文学そして歴史によって彼らの心を開化させることにある。この愛の種を育てて児童の民族意識を高め、彼らを真の民族への奉仕者とするには、民族の歴史を教えることが必須である。したがって先進的な国民は、自国の歴史をことのほか重視している。歴史学を重んじるのみならず、歴史学者や歴史家も敬服してやまない。しかし、遺憾なが

(4) この民族名論争については[小松 2022]を参照。なお本節はほぼこの第4節からの抜粋である。

(5) ヤウシェフについては、[大石 1998; Brophy 2016: 135-137]を参照。

らわがトルキスタンにおいては今に至るまで「歴史」が重んじられることはなかった。初等学校のための民族史の教科書(トルキスタン史)は書かれたことがないのである。

そのためだろう、我々の学校に学ぶ生徒にも卒業生にも民族の精神や意識は欠けており、心底から民族のために奉仕している者も見られない。

彼が想定しているのはまさに国民教育のための歴史教科書であり、このような発想は当時としてはじつに斬新であったにちがいない。しかし現実はどうか。彼は続けて言う。教師たちは歴史の重要性を知り始めているが、「教科書がないために生徒に教えようとしてもできないのである」、だとすれば「他のことには一切かまけることなく、寸刻も無駄にせず、すみやかにわれわれの学校のために『トルキスタン史』を書かねばならない。さて、これを書くのはだれか？ この問いにはわれらがカーリー [コーラン詠み] や識者 ziyālılarımız に答えてもらおう」と [Yāvshēv 1914: 1-2]。

ヤウシェフはトルキスタンの知識人に奮起を促しているかのようである。これに対してサマルカンドの指導的なジャディード知識人ベフブーディー (1874-1919) は、翌月自らが刊行する雑誌『アーイナ』に「トルキスタン史が必要なり」と題する論説を書いて応答している。

歴史はきわめて重要かつ有益なものである。歴史からは、ある民族がどのようにして発展したのかを学んで教訓を得る、あるいはある民族がどんな理由で衰退し、しまいには滅亡してしまったのかを学んで、ここから教訓を得ることもできる。[中略]

[しかし] 今もわれわれトルキスタン人は、父祖たちの事績もトルキスタンの歴史的な出来事についてもまったく無知なままである。なぜならトルキスタン史について新しい研究に基づいた体系的で有用な著作はいまだに書かれていないからだ。実のところ、このような歴史を書く人材がテュルクの中から出ていないのは、テュルクの子らが不肖であり、真正の息子ではないことの証左である。[中略]

『トルキスタンの声』紙に「われわれの民族史は誰が書くのか」という趣旨の論説が載った。思うにこのような歴史を書くのは極めてむずかしい仕事であり、いまこれを実現するのはわれわれの手に余るようだ<sup>(6)</sup>。したがって、この仕事はトルキスタン史に親しみ始めた若き歴史家、アフマド・ザキ・ヴァリディ氏の手腕に期待している [Behbūdī 1914: 898]。

(6) ベフブーディーの躊躇いは率直な告白と思われる。当時の知識人が理解する歴史とは、先述のようになおハン国史の枠組みが残るものであり、さらに歴史教科書を執筆できる人材も限られていた。それでもハジムイーヤンやベフブーディーがトルキスタン史の必要を訴えた背景には、サマルカンドの地域的な特性があったかもしれない。1868年ブハラ領からロシア統治に委ねられてから久しいサマルカンド地方の知識人は、ハン国史の枠組みからは相対的に自由であり、ここにトルキスタンを全体としてとらえる発想が他に先駆けて芽生えた可能性がある。

こうしてベフブーディーは、気鋭の歴史家ヴァリドフ(後のトガン、1890–1970)に『トルキスタン史』の執筆を託している。たしかに彼はすでに『テュルクとタタールの歴史』(カザン、1912年)を上梓して内外の注目を集め、バルトリドラロシアの東洋学者からも将来を嘱望されていた[小松 2018: 34–37]。これはカザンのカーシミーヤ・マドラサ講師でもあったヴァリドフが講義のために準備していた教科書「テュルクの歴史」をもとにしており、彼が構想していたテュルク全史の前半部をなしていた。彼の『回想録』によれば、これを読んで強い感銘を受けたコーカンドの知識人ユーススジャン・ダーデ・アガリク(1884–1937)は、著者にトルキスタン史の増補を提案して協力を約束し、自らもテュルク史の著作<sup>(7)</sup>をものしたという[Togan 1969: 107–109]。

このようにトルキスタン史、とりわけ学校教科書としてのトルキスタン史への関心は高まりつつあったが、ロシア革命以前にそれが具体的な著作に結実した例は今のところ知られていない。管見の限り、その最初の例は本稿でとりあげるムフタル・バキルの著作である。

## 2. 著者について

ムフタル・バキルは1887–89年ころ、オレンブルグ地方の村にタタール人のイマームを父として生まれ、母も教養人であったという。両親がしばらくイスタンブルに暮らしたため、彼もそこで初等教育を受け、帰国後にオレンブルグのキャラヴァンサライ・マドラサ、ついでカザンの名門校カーシミーヤ・マドラサ<sup>(8)</sup>に学んだ。その後オレンブルグで高名な学者からハディース学を学び、マドラサで教えることもあったらしい[Мадьярова 2014: 43]。やがて彼はヒヴァに赴く。『ワクト』の伝える情報によると、ヒヴァのサイド・イスファンディヤール・ハンは即位の2年目(1911年か)に宮廷の高官たちの子弟を教育するために数名の教師を招聘し、皇太子を含む20数名の生徒の教育をロシアから招いたムフタル・バキルに委ねた[Ramađān 1914: 2]<sup>(9)</sup>。この間の事情について、彼は自分の名前は出さずに、本書の中(ヒヴァ・ハン国の教育の項)で次のように説明している。

(7) この著作がどのようなものであったのかは、出版の有無も含めて不明である。なお、同時期にトルキスタン総督府の発行する現地語新聞『トルキスタン地方新聞』の副編集長を務めていたムッラー・アーリム・マフドゥーム・ハジの『トルキスタン史』(タシュケント、1915年)が刊行されている。これはブハラ・ヒヴァ両ハン国の歴史と半世紀に及ぶロシア統治下での変化も記しているが、事実上はコーカンド・ハン国史であり、ジャディード知識人がめざしていた民族史とは異なる。この著作については[Бабаджанов 2010: 42–45; Агзамходжаев 2021: 75–76]を参照。

(8) このマドラサについては[Ross 2020: 155–157]を参照。

(9) この記事は『テルジュマン』にも転載され(*Terjūmān* 75 (1914.4.3): 2–3)、ロシア・ムスリムの間により広く知られることになった。バキルのヒヴァ招聘については、[Togan 1942–47: 260]も参照。なお、ヒヴァにおけるタタール人教師の活動については、アブデュルレシト・イブラヒムが主筆を務めるイスタンブルの『イスラーム世界』誌も報じていた(“Hive’de maarif,” *İslām Dūnyası* 22 (1914.2.25): 367)。

ヒヴァに最初の新方式学校を開くためにオレンブルグの故アブドゥルガニ・バイ・フサイノフが1898年オレンブルグから一人の教師を派遣した<sup>(10)</sup>。その後、1904年に最初の新方式学校を開くべくムハンメディエ・マドラサからテュルク・タタール人教師を招聘したのはウルグ・メフメト・マフラム(神の恵みあれ)である。また現在の君主サイド・イスファンディヤール・ハン陛下が皇太子のときに自費で新方式学校を開いてムハンメディエ・マドラサから教師を招き、最後に1910年に大宰相のサイド・イスラーム・ホージャ閣下がオレンブルグから教師を招いて新方式学校を開き、自らもイスラミーヤという名の見事な学校を建てられた。現在ヒヴァ国には10校の新方式学校があり、テュルク・タタール人教師が運営している [Bakir 1918: 168]。

つまりバキルは、ロシアの保護国ヒヴァのイスファンディヤール・ハンと大宰相イスラーム・ホージャが共同して進めた改革プロジェクトの一環として宮廷に迎えられたことがわかる。ヒヴァの新方式学校については、「海の一滴」ほどに少なく、しかも一部は政府高官の手中にあるため、事実上なきに等しいという同時代人の批判もあったが [‘Uthmānī 1912: 559]、バキルは前向きに取り組んだようである。彼の仕事ぶりは1913年2月、在ホラズムの教師ムフタル・バキルの名前で『シューラー』に寄せた一文「民族のための依頼」からうかがうことができる。これはトルキスタンの教師、とりわけ新方式学校の教師に宛てた4項目の質問書であり、要約すると以下の通りである。

1. トルキスタンのテュルク・ウズベク生徒の初等教育で読み書きを教えるにあたり、書体はナスフ体(北のテュルクの刊行物で使われるタタール・アルファベット)とトルキスタン人が慣れ親しんでいるタアリーク書体(石版刷りのアルファベット)のどちらが適切か。
2. ナスフ体でよしとしても、トルキスタンの学校でタタール語の読み書き教科書を使って教えるのはむずかしくないだろうか。言語や方言の違いはどのように調整すればよいか。
3. トルキスタンで使用する読み書き教本はナスフ体で、かつテュルク・ウズベク語で新たに作成し、続いて同様な読本を準備するのが適切ではないだろうか。
4. トルキスタン人用の教科書ではどの正書法がふさわしいだろうか。トルキスタンの慣用に従うか、それとも『シューラー』や『ワクト』、『ヨルドゥズ』などで使われている新しい正書法がよいか。とくにシャツダやファトハ記号付きの文字はどう書けばよいか。これらの問題は、ロシア・ムスリムの観点からはさほど重要ではないが、トルキスタ

<sup>(10)</sup> このタタール人豪商と親交のあった前記のイブラヒムも「故人の会合では教育以外のことは話題にならなかった。ヒヴァやウルゲンチにも教師を派遣したと語っていた」と回想している [Sheref 1913: 134]。

ンで教育にあたる者にとってはいつも苦勞するところである。そこで経験ある教師諸兄のご意見をお聞かせ願いたい [Bakir 1913: 122]。

この投書はトルキスタンに着任したタタール人教師の直面した実践的な問題を率直に提起したものであり、バキルが真摯な教師であったことを物語っている。ちなみにこの投書から4ヶ月後、『シューラー』はいずれもトルキスタン現地での教歴を有する3名の回答をまとめて掲載した。第1の書体についてはロシア・ムスリムの定期刊行物で広く用いられているナスフ体が支持されたが、ホラズムの教師は現地での必要性に鑑み、2年次以降はタアリーク体も教えるべきと指摘した。また、第4の正書法については、現地での慣用に従うべきとする意見と、それではガスプリンスキー氏が30年来唱えている言語の統一論に背くという意見とが対立することになった [Shūrā 13 (1913.7.1): 403–405]。文章語の問題は1920年代まで続く難題であったが、バキル自身は母音の判読が容易な正書法を採用している。

ロシア二月革命が起こると<sup>(11)</sup>、彼は青年ヒヴァ人に与してハン国の改革に尽力したと推定される。青年ヒヴァ人は新設の政府と議会で優勢を占めたが、まもなく反動派が巻き返し、これにヨムト・トルクメンの反乱が加わってヒヴァの政治情勢は混迷に陥った。こうしたなかでバキルは1917年6月末ヒヴァ・ハン国の新ウルゲンチ住民代表としてペトログラードで開かれた全ロシア・ムスリム評議会の会議に出席し、ヒヴァの状況を説明するとともに支援を要請している [Исхаков 2019: 256–257, 265, 268–269]。しかし、おそらくヒヴァの情勢が悪化したためだろう、彼は活動の場をタシュケントに移した。これは彼の兄カビル・バキロフ(1885–1944)がタシュケントのタタール人組織「イッティファーク」のリーダーとしてムスリムの自治運動を先導し、新聞『ウルグ・トルキスタン』(1917年4月–1918年11月)の編集長を務めていたこととも関係していただろう [Исхаков 2004: 273, 303]<sup>(12)</sup>。ムフタルは早くから同紙で革命家の気風もあらわに健筆をふるい、トルキスタン自治をめざす運動に邁進した。

十月革命後、コーカンドにトルキスタン自治政府が成立した翌月、バキルが同紙に寄稿した論説「トルキスタン自治とトルキスタン人」では、圧政からの解放と自立の達成という自治宣言の歴史的な意義を宣揚し、「これは幻想ではなく現実だ」とする一方、現下のアナキーな状況の中で自治を確立するのは容易なことではなく、新しい国作りのためには財政制度の確立から、商工業の振興、土地・水利問題の解決、通信・交通の整備、裁判・宗教・厚生業務の監督、保安機関の設立、教育委員会の組織、憲法制定まで遠大な課題が待ち受けている

(11) ロシア革命期のムスリム地域の動向については [宇山 2017] を参照。

(12) なお、本書の発行者は、「K. M. バキロフ兄弟とその会社・商会」であり、兄弟はそれなりの資産家であったと推定される。

と指摘する。われらトルキスタン人が自治を実現するには党派や階級の違いを超えた連帯と自覚が不可欠であり、他国の人々にわれわれの有する自治の能力を示さねばならない。100人中わずか20人しか自治の真の意味を理解していないなか、物書きや説教者は読者や聴衆に、教師やムダッリスは生徒に自治の価値をわからせなければならいと説く [Исхаков 2019: 439–441]。

1918年1月の論説「沈黙」では自治政府の布告や計画がロシア語の公報で伝えられていることを批判している。曰く、テュルクの揺籃の地、ナヴァーイーやバーキルガーニーらが輩出したトルキスタンで、その公報が人口では5%にすぎないロシア人の言語で発行されているのは許しがたい。われわれは、非ロシア語で統治することはできない、ロシア語なくして科学と文化の発展はあり得ないという先入観から抜け出していない。ロシア人は本心では自治政府に服することをよしとせず、ポリシェヴィキに至っては自治政府を認めていない。賢き祖先たちの曰く「ロシア人と仲良くするなら斧を忘れるな」と。テュルクには公報を担えるすぐれた文章語があり、書き手がいる。統治の法にはチンギスやティムールのヤサがあった。今はロシア語・テュルク語の翻訳者がいる、と [Исхаков 2019: 462–464]。ここには言語ナショナリズムが横溢している。

続く論説「われわれはいつ人となるのか」では、全土にアナーキズムが広がり、自治が内外の脅威にさらされ、異常な物価高と飢餓が猛威を振るっているときに、ウラマー衆がカーディーの選任など利己的な目的のために抗争し、不和を煽っていることを批判する。曰く、思えばイスラーム共同体を襲った最初の災厄も [第3代カリフ] ウスマーンの選任が残した禍根であった。今は党派に分かれるときではなく、テュルク・ムスリムとして団結すべき時である。アッラーと預言者がわれらに団結を求めている以上、不和の道を開くウラマーはシャリーアの侵犯者にほかならない。さらに正当な自治政府に敵対する行為は最大の罪であり、かのハワーリジュ派に匹敵する、と。ウラマー批判を主眼としたこの論説にはイスラームの論理が目立つが、最後は「偉大なるタンル[テュルクの上天神を想起させる神]」にテュルク国の発展への助力を求めて終わる [Исхаков 2019: 466–467]。行間からは自治政府の直面する危機への懸念をうかがうことができる。中でも最大の脅威はロシア全土で横暴をきわめるポリシェヴィキであった。1917年の末、彼はこう書いていた。「自治はあらゆる面で危機にある。自治の確立には内外ともに多くの敵がいる。とりわけ現在政権を握るポリシェヴィキはトルキスタンになんとかして無秩序を作り出そうとしている。貧者と資産家、農民と商人、青年党とウラマーの間に不安や敵対の種をまこうとしているのだ」と [Мадьярова 2014: 48]。

はたせるかな、トルキスタン自治政府は1918年2月赤衛隊とアルメニア人部隊の攻撃を受けて崩壊し、コーカンド市街は廃墟と化した。バキルが本書を撰筆したのは同年5月のことである。本文には後述するように自治政府の崩壊と翌月の青年ブハラ人と赤衛隊によるブ



ハラ革命の挫折（コレソフ進軍の失敗）までが描かれ、さらに1918年4月初めタシュケントのバラクハン・マドラサの学生がトルキスタンで初めてマドラサ改革の要望書を提出したことにふれている[Bakir 1918: 77-78]<sup>(13)</sup>。したがって、彼はロシア革命と内戦という激動のなか、自らも革命運動を担いながら本書を書き進めていたことがわかる。これはこの歴史教科書にまれに見る迫真性を与えることになった。自治政府の崩壊後、彼はタシュケントの指導的なジャディード知識人ムナツヴァル・カリ(1878-1931)の発案した人民大学 Halk Dorilfunumi<sup>(14)</sup>の創設メンバーに加わり、1918年5月の開校後は大学執行部で書記長を務め、同名の学術・経済・文芸新聞（ソヴィエト期で最初のウズベク語新聞）の編集にもあたった。そして1918年7月、サマルカンド州にも人民大学を開校するためにベフブーディーを長とする特別委員会が設置されると、バキルもこれに参画してタシュケントでの経験を伝授した[Холбоев 2003: 52, 62, 64]。しかし、その後の消息は杳として知られていない[Мадьярова 2014: 48-49]<sup>(15)</sup>。

彼の人物像をまとめれば、ヤウシェフと同じく「テュルクの祖地」に深い憧憬をいだき、トルキスタンの教育改革と自立に献身したジャディード知識人ということができる<sup>(16)</sup>。出自はタタル人だとしても、トルキスタンにおける長い活動歴とテュルク主義の立場からすると、彼はこの地歴教科書を異邦人ではなく同胞として執筆したと推察される。トルキスタンのジャディード運動は当初からタタル人とのいわば共同プロジェクトの側面をもっていたが、彼もまたその一員に数えてよいだろう。

(13) この件についてサマルカンドの新聞は『ウルグ・トルキスタン』からの転載として次のように伝えている：ロシアの大革命は、タシュケントのマドラサの虐げられた学生たちをも怠惰の眠りから目覚めさせた。マドラサを改革して[旧来の]ムダッリスや助手たちを時代にふさわしい進歩派や有能な学者に替えるべく真剣な闘争が始まったのである。タシュケントの名門とされるバラクハン・マドラサのムダッリス職について異論が出され、それは他のマドラサにも波及しはじめた。この紛争は10日間で社会革命の様相に転じた。反動派が異論派を「ジャディード、無神論者だ」と呼べば、異論派は彼らを「詐欺師、裏切り者」と呼び、双方の間に激しい闘争が始まった。これがいかなる結末を迎えるかは神のみぞ知る(Hurriyat 86 (1918.4.22): 4)。

(14) ちょうど1918年5月に開校された人民大学は、初等学校、職業学校、師範学校の3段階からなり、教員数は180名、師範学校ではフィトラトも母語を教えたという[Мунаввар Қори 2001: 8-9]。『人民大学』紙によると、出自や階級の別なく意欲ある学生を受け入れて知識や技術を教え、社会に有為で自立した人材を育成する人民大学の発想はアメリカ合衆国に生まれ、ヨーロッパを経由してモスクワのシャニャフスキー人民大学(正式名称はМосковский городской народный университет имени А. Л. Шанявского, 1908-18年)に継承され、ロシア革命後に同種の大学がニジニ・ノヴゴロド、カザン、トムスクにも生まれたのち、ロシア知識人によってトルキスタンに伝えられたという。タシュケントではまずロシア人、ついでムスリムの人民大学が開かれ、その傘下でいくつもの学校が機能していた[Холбоев 2003: 51, 64, 100-101]。なお、この人民大学は現在のミルザ・ウルグベク名称ウズベキスタン国民大学の前身と見なされている。

(15) このようなバキルの経歴は、ムスリム・コムニストをはじめソヴィエト体制下で活動を継続したジャディード知識人と軌を一にしている[Khalid 1998: 287-297; 2015: 90-116; 小松 1996: 166-168]。

(16) トガンもトルキスタンで新しいウズベク文芸の発展に貢献した「カザン・テュルク」の一人としてバキルを評価している[Togan 1942-47: 504]。

### 3. 本書の構成と内容

**執筆意図** 著者の執筆意図は緒言に明確に記されている。曰く、

今日にいたるまでマクタブ・マドラサ教師の一番の悩みは、ルカヴォーツトヴォ＝指導書として有用な、すなわち学術的な教科書を欠いていたことである。とりわけトルキスタンの歴史と地理を解説したテュルク語の著作がないことは大きな欠陥であった。[中略]トルキスタンの自然の豊かさ、植生と動物、人々の暮らしと生業、綿花や果樹の栽培、養蚕などの重要な生業について人を満足させる説明がなされたことはない。[中略]

こうした現状に鑑み、私はトルキスタンに関するイスラームおよびヨーロッパ文献を参照し、またムスリムの雑誌や新聞紙上でトルキスタンについて書かれた学術的、社会的な論説をたよりに、意を決してテュルクの学校にトルキスタンの地理と歴史の教科書あれかしとこの著作をものした次第である。

じっさいトルキスタンについてヨーロッパ諸語ではきわめて多数の(ロシア語だけでも300点以上)著作が出ているのに対して、テュルク語では一つもないではないか。われわれテュルクはなんとも恥ずべきことに、自分の郷土について自分で調べる代わりに外国人から教わっているのだ！さらに悔しいことに、われわれはヨーロッパ人にどんな著作があるのかも知らない。白状しなければならないが、ヨーロッパ人はトルキスタンにおける研究や探査によってテュルクに偉大な貢献をしてきた。地中に埋もれていたテュルクの遺物を発掘し、忘れられかけていたわれわれの文明と伝統をよみがえらせ、テュルクの文明を全世界に紹介したのである。このような貢献にはどれほど感謝しても足りないことだろう。しかし、ヨーロッパ人のテュルクと学問に対する偉大な貢献をたたえるとしても、彼らの著作に書かれていることのすべてを真実として受け入れることはできない。学術と科学の面で大きな価値を有する著作であっても、その一部には民族とイスラームの観点から真実に反することがらが書かれており、著者が偏見や[自身の]民族的な感情にとらわれていることもある。これらの文献を参照するにあたっては、この点に格別の留意をしたことをあらためて記しておくなくてはならない。

本書はトルキスタンの地理と歴史に関する最初の試みであり、したがって不備があることはもちろんである。本書を学校での指導書として使われる教員諸氏におかれては、使ってみての感想や批判をよせてくださることをお願いしたい。

神助によりて

ムフタル・バキル タシュケント [1] 1918年5月 [Bakir 1918: 2]。

このように著者はテュルク主義の旗幟を鮮明に掲げながら、トルキスタンの地歴教科書の欠を塞ぐために執筆を決意したと述べ、本書の意義を宣明している。ヨーロッパ人による東洋学の成果を評価しつつ、批判的な目で見ることの必要性を説く姿勢は冷静であり、本書を利用する教員たちに向けた謙虚な言葉は、数年前『シューラー』誌上で読み書き教育の実践的な課題について問いかけを行った真摯な教員の姿に通じている。言語はもちろんテュルク語である<sup>(17)</sup>。なお、本書に地図などの図版はない。

**参考文献** 続いて著者は執筆にあたって参考にした文献を示しているが、書名の一部か著者名を列挙するにとどまっている。確認できる参考文献を挙げてみると、テュルク諸語では、アブルガーズイー・バハドゥル・ハン『テュルクの系譜』、メルジャーニー『カザンとブルガルに関する情報の集成』（カザン、1885年）、ハサン・ガタ・ガバシー<sup>(18)</sup>『詳説テュルク民族史』（ウファ、1907年）、『ヒヴァ旅行記』（J. A. MacGahan, *Campaigning on the Oxus and the Fall of Khiva*, London, 1874のオスマン語訳、イスタンブル、1875年）、メフメト・エミン『中央アジア旅行記』（イスタンブル、1878年）<sup>(19)</sup>、シムセッティン・サーミー『歴史地理事典』（イスタンブル、1889-1898年）、ペルシア語ではナルシャヒー『ブハラ史』（新ブハラ、1894、1904年）、『アミール・ティムール』<sup>(20)</sup>など、ロシア語ではИ. В. Мшукетов, Д. Н. Рогов, Г. И. Данилевский, И. И. Гейер, К. К. Аваз, М. В. Гурлиев, Н. Павлов, Н. П. Остроумов, А. Шиф, Н. С. Риксин, М. В. Лавров, В. И. Юфелев, В. Л. Тагеревら、トルキスタンの地理、地誌、東洋学、農業などの研究で知られる著者名を確認できるが、個々の著作を特定することはむずかしい。また、このリストには当時利用が可能だったはずの前述のヴァリドフの著作やトルキスタンの詳細な地誌として有名なВ. И. Масариский編『トルキスタン地方』（サンクト・ペテルブルグ、1913年）などは見えない。しかし全体としてみれば、まだ誰も書いたことのないトルキスタンの地歴教科書を書くにあたって著者が周到な準備をもつてのぞんだことは疑いない。バキルは歴史学や地理学の専門的な教育を受けたわけではないが、一人の教員として務めを果たそうとしたと推測される。

**総説** 本書は目次を欠く。全体を見ると、総説と地方ごとの各論（トルキスタンの5州とブハラ・ヒヴァ両国の全7章）に分けることができる。いずれも地勢、気候、水系、植生と動物、住民と人口、ロシア人の到来、産業と生業、教育、行政、史跡や主要な都市などの項目ごと

<sup>(17)</sup> マディヤロフは、平易でわかりやすい言葉で書かれているとしているが [Мадьярова 2014: 50]、タタル語の要素は濃厚であり、生徒の理解には教師の手助けが必要ではなかったかと推察される。

<sup>(18)</sup> 彼については [Farkhshtov-Isogai 2020] を参照。

<sup>(19)</sup> 本書については [佐々木 2008] を参照。

<sup>(20)</sup> これは石版刷りの刊本『ティムール・ナーマ：ペルシア語全集』（タシュケント、1913年）の可能性がある。この刊本については [Sela 2011: 33] を参照。

に解説を加え、そのため重複するところもある。以下、地理の解説は基本的に省き、歴史と文化、民族、社会、教育などを中心に本書の内容を紹介することにしたい。

総説の冒頭で、トルキスタンは中央アジアに位置する大きなくにであり、行政の面で東トルキスタン、西トルキスタン、そしてアフガン・トルキスタンの3部からなると説明するが、東トルキスタンとアフガン・トルキスタンに関する解説は簡略であり<sup>(21)</sup>、ただちに本題の「19世紀半ばにロシアの支配下に入ったテュルクの住むロシア領トルキスタン」の総論に進む。ここで著者は地理と民族の概観に続いてトルキスタン史の概説を述べており、要約すると以下のとおりである。なお、記述には少なからず誤りも見られるが、原文のままとする。

古代の定住民や遊牧民はアーリア系といわれ、現代のタジクはその末裔である。紀元前の昔、テュルクが彼らを駆逐したが、黒海とカスピ海沿岸で遊牧していたスキタイやサカ、アラル海からバルハシ湖にかけて遊牧していたマッサゲタイ・テュルクにはアーリア系の血もまざっていたという。紀元前330年に中央アジアを征服したアレクサンドロスは、フジャンド近郊に「遠隔のアレクサンドリア」という都市を建て、ソグド地方も支配したが、ギリシア人の統治は長くは続かなかつた。その後、東方から月氏、次いでフン・テュルクが現れて大きなカガン国を建てた。3世紀初めにフンが滅ぶと非テュルクの柔然や鮮卑がテュルクのくにを支配したが、6世紀になるとフン・テュルクの末裔が突厥あるいはオグズの名で出現し、トルキスタンをあらたに征服して大オグズ・カガン国を建てた。その文化的な貢献は大きく、最古のテュルク語アルファベットを作ったのはこのオグズ・テュルクである（ビルゲ・カガンとキョルテギンのオルホン碑文に刻まれている）。

その後イスラームを信奉するアラブの征服がトルキスタンに及び、714年クタイバ・ブン・ムスリム指揮下のアラブ軍はソグドとブハラを征服した。アラブはテュルクの間にイスラームを広め、古来のテュルク文化に代わってアラブ・イスラーム文化が成立した。10世紀以降、テュルクのガズナ朝やセルジューク朝がトルキスタンに君臨し、スルタン・マフムードやマリクシャーらの名君が出た。しかし、12世紀になると東方でタートル・モンゴルが台頭し、13世紀初めチンギス・カン指揮下のモンゴル軍がわずかの間にトルキスタン全土を征服し、モンゴル・テュルクの地にとどまらず中国、インド、イラン、さらに東ヨーロッパにおよぶ未曾有の大国家を建設した。ここで著者はモンゴル帝国について注を付し、大征服の概要とチンギス没後の諸ウルスの分立、カラコルムに座す大カアン *ulugh qaān* の威勢やクリルタイなどについて説明を加える。なお「シル川とアム川の間、東及び中部トルキスタンの地域がチャガタイ・ウルス *Jaghatay khanning ulusi*」であり、ロシア諸侯は大カアンの勅令によって

<sup>(21)</sup> 簡略とはいえ、東トルキスタンとアフガン・トルキスタンを本来のトルキスタンの一部とみなすのはベフブーディーと同じであり [小松 1996: 121-122]、ヤウシェフも東西トルキスタンを一体とみなしていた。こうした同時代人の地域認識はあらためて検討するに値する。

はじめて地位に就けたと記す。

モンゴルは長くトルキスタンを支配したが、トルキスタン人に影響を及ぼすことはなく、むしろ文化的にはより高度であったテュルクに同化した。モンゴル軍はトルキスタンに大きな打撃を与えたが、征服に向かった都市が降伏すれば危害を加えず、降伏しなかった場合も学者や職人、医師らをモンゴリアに連行して仕事に就かせた。総じてチンギス・カンは分裂していたテュルクを統合し、その間に学問と技術の普及を促すことによってテュルクの文化に多大の貢献をした。その後テュルクのくには分裂し、トルキスタン東部はチャガタイ・ハン、南はフレグ・ハン一族、シル川およびアム川流域はシバン・ハンに属して個別に統治されるようになった。

チャガタイ・ウルスで諸勢力が乱立するなか、頭角を現したのがテュルクの偉大な統率者として知られるティムールであり、分裂したモンゴル帝国から新たなテュルクの政権を樹立した。著者はティムールの輝かしい戦歴を紹介したうえで、テュルクの君主のなかでもっとも精力的で勇猛な君主であり、教育は受けずとも聡明でテュルクの歴史や慣行に通じ、語学にも優れていたと評価する。ただし敵に対しては容赦なく、その苛烈さはモンゴルにまさった。しかし、一方でイスラームおよびテュルク文明の発展に大きく貢献し、サマルカンドをはじめとする多くの都市を壮麗なモスクやマドラサなどで飾るとともに、イスラームの学者には敬意を払い、彼らを保護したと記す。このように著者はティムールの二面性を認めつつ、その偉大さを評価するのである。

これにティムール朝の後を襲った「ウズベク」の項が続く。すなわち14世紀金帳汗国 *Altun orda* の君主ウズベク・ハンがイスラームを受容し、配下のテュルク諸部族にイスラームを広めることに努めた。こうしてイスラームを受容したテュルクは、シャーマニズムのテュルクや他のウルスのテュルク・モンゴルと自分たちとを区別するために、すなわちウズベク・ハン配下のムスリム・テュルクという意味でウズベクと自称した。これがやがて民族の名称となる。15世紀に強大化したウズベクは、アラル海方面から南下して先住のチャガタイ・テュルクと融合し、チャガタイ語を話す一民族を形成するに至った。ウズベクはかつてトルキスタン全土を支配したが、強力なハン国を形成するには至らず、小国に分裂して相互の抗争を繰り返した。おもなハン国は、ブハラ、ヒヴァ、コーカンドの3国である。ブハラの君主アミール・サイイド・アーリム・ハンがウズベク・マンギト部族の出身、ヒヴァのサイイド・イスファンディヤール・ハンがウズベク・コンギラト部族、コーカンド最後の君主フダーヤール・ハンがウズベク・ミング部族の出身である [Bakir 1918: 28-35]。

こうして著者は前近代のトルキスタン史を通史として提示しているが、このような叙述形式はトルキスタンの現地においてはおそらく初めての例と考えられる。ここにはハン国史の枠組みを脱した近代的な歴史叙述の手法が確認できる。ティムールに置かれたアクセントは、

ティムール朝期の栄華と現代の隷属・停滞との落差を明示して変革をよびかけたジャディード知識人の論法<sup>(22)</sup>に即している。

**住民と民族** 通史に続くのが諸民族の解説である。キルギズ・カザクあるいはカザク・キルギズと表記されるカザフについて著者はこう述べている。

ジョチ・ウルスに由来するアク・オルダに服属していた諸部族が15世紀に自立したもので、大草原で自由な生活を送っていたためカザクと呼ばれた。ウズベクがトルキスタン南部に落ち着いたころ、カザフは諸部族を糾合して大きな民族を形成し、バルハシ湖からヴォルガ川に至る草原を支配した。〔この後、カザフ・ハン国の盛衰が注で解説される。17世紀に盛期を迎え、18世紀に3つのジュズに分裂して順次ロシアに服属したと説明するが、ジューンガルとの抗争についての言及はない。〕カザフは、今に至るまでテュルク性を純粋に保ってきた民族である。その言語も純粋であり、他の集団に見られる方言差はまったくない。カザフ語は豊かで雄弁な言語であり、表現力にすぐれている。英雄叙事詩などの口承文芸が盛んであり、アクトンたちの語りは芸術の域に達している。彼ら遊牧民の生活様式は乳製品の食物を含めて古代のテュルクを彷彿させる。客人をもてなし、年長者を敬い、言葉を違えないカザフの近親関係は堅固である。現在の世界のムスリムの中では宗教と民族の点でもっとも誠実であり、かつ狂信的ではない。彼らの間ではイスラーム法とならんで古来の慣行や法が機能している（中国領内のカラ・キルギズでもイスラームの信仰とシャーマニズムの儀礼が併存している）。大多数は遊牧民で、文化的な中心地から遠く、常に移動するため、教育や技術、学術は十分に普及せず、イスラームの学知はアラブ、ヒヴァ、ブハラのアラブが伝え、その後カザフの間からも各地に留学する者が現れた。ロシア統治下でカザフ人を教えていたテュルク・タタール人教師は、反ロシア宣伝を広めカザフとタタールの統合をめざす者として流刑や投獄に処されたが、カザフはテュルク・タタール人教師の招聘を続ける一方、世俗の学問と技術を習得するために子弟をロシア語学校で学ばせた。世俗の学問に加えてイスラームの学知を求める者たちは、子弟をテュルク・タタールのマドラサ（カルガル、イステルリバシュ（ステルリバシュ）、トロイツク、最近はおレンブルグやウファ、カザンの新方式マドラサ）に送り、近年はアラビアやカイロ、イスタンブールへの留学も始まった。こうしてカザフの間には学識ある者が多数輩出しており、民族文学が発展の道をたどるとともに新

<sup>(22)</sup> たとえば、先に言及した（2頁）ハジ・ムイーンの寄稿は、擬人化されたトルキスタンがティムール朝期の「楽園のごときサマルカンド」と現在の凋落した姿との落差に耐えきれず、現代人に文明化の努力を促し、『テュルク・トルキスタン史』の編纂を訴える筋書きになっている [Hajī Mu'īn 1913: 10]。フィトラトもロシア革命期に書いた作品で、ティムールの墓前に参ったテュルクが異国の支配下に陥った責任を悔い、かつての栄光と偉大を復活させる覚悟を述べる場面を描いている [小松 1996: 126-128; 帯谷 2022: 54-56]。「楽園のごときサマルカンド」については [木村 2022] を参照。

方式学校も日々増加している。カザフの人口は600万を数える [Bakir 1918: 35-39]。

カザフに対する著者の評価は極めて高い。その理由は、カザフは古来のテュルク性を正しく保持しているというテュルク主義者バキルの確信と近代教育に対するカザフの能動的な姿勢にあるようである。これと対照的なのがサルトに対する評価であり、著者はこう述べている。

トルキスタンの諸都市に住み、商業と手工業を生業とするサルトは、一部の歴史家によれば、テュルク・ウズベクあるいはテュルク・モグールとイラン系との混血から生まれた民族だという(また一部の歴史家は、サルトは遊牧民に対置される定住民の同義語だとしている)。サルトは、風貌や衣装、外見ではタジク人に似ており、言語はチャガタイ方言のテュルク語である。サルトは元々テュルクであってイランの血がまざり、タジクは元々イラン系であっていささかテュルクの血がまじった民族である。サルトはトルキスタンに250万人を数え、商売にすぐれ、生活では節約に努めて勤勉であり、商業の繁栄は彼らの手腕による。彼らはみなムスリムであり、イスラームの教えは征服者のアラブから学んだ。きわめて熱心な信者であるとともに、いくらか古来の慣行を固守している。都市で文化的な生活を送っているために、モスクやマドラサ、学校は多く、これらはワクフによって財政面では保証されている。しかし、学びと教えの方法は旧方式によっており、現世にも来世にも役に立たない教えによって民族の子らの人生を害しているのである。これがためにサルト人の学問と教育は発展しなかった。多くは読み書きを知らず、無知である。民衆の文芸はカザフに比べるとはるかに劣る。

サルトに対する厳しい評価は、おもに旧来の教育方式の弊害に起因している。ここにはヒヴァにおける新方式学校の旗手として旧方式を固守する保守派と闘ってきた著者の経験が反映されているのだろう。一方、彼はサルトという帝政期の公式の民族名称をこだわりなく使用しているが、トルキスタンのジャディード知識人はこの名称の不当さを1911-14年の間、トルキスタンのみならずロシア・ムスリムの新聞・雑誌誌上で訴えていた<sup>(23)</sup>。我々はテュルク、ウズベク、あるいはトルキスタン人だという彼らの主張をバキルが知らなかったはずはない。それでもサルトという名称を使ったのはなぜか、これについて著者はなにも語ってはいない [Bakir 1918: 41-42]。

以上の他、著者はカラ・キルギズ[クルグズ]、トルクメン、カラカラバク、タランチなどの諸民族について個別に解説を加えている。ここで確認されるのは、彼はトルキスタンをテュルクの祖地としながら、それぞれに個性をもつ諸民族の存在を認めていることである。それでも彼には6年後に出現する民族別共和国の発想はなく、ロシア領トルキスタンに成立したばかりのトルキスタン自治共和国の枠組みを前提としてテュルク系諸民族の連帯と共生は自明と考えていたと推定される。これはまもなくムスリム・コムニストとして頭角を現し、テュルク・ソヴィエト共和国を構想するトゥラル・ルスクロフ(1894-1938)と軌を一にする考え

<sup>(23)</sup> 詳しくは [小松 2022] を参照。

方である<sup>(24)</sup>。

**近現代史** 続く「ロシア人のトルキスタンへの到来」の項で、著者は近現代史を以下のよう  
に略述する。

ロシアのツァーリは16世紀に征服に着手し、19世紀に入るとウズベク・サルトのハンたちの不備や怠慢を利用してトルキスタンの攻略を進めた。ロシア軍は1865年タシュケントを占領し、ブハラとヒヴァを攻めて保護下に置き、1876年にはコーカンド・ハン国を廃してフェルガナ州を置いた。ロシアが征服を進めた時代、トルキスタンはアミールやハンの専制支配下にあり、私欲にかられた君主たちは相互に争い、また君主位を争う闘争が絶えない状況にあった。ロシア軍はこれを利用して攻略を進めたのである。ロシア軍の直面した困難は水と食糧の調達であり、さしたる抵抗は受けなかった。

ロシアの高官は「野蛮な民」を文明化し、砂漠に灌漑水路を開いてトルキスタンを豊かにすることなどを約束したが、教育事業は熱心な宣教師〔文教政策を担ったオストロウモフ(1846–1930)<sup>(25)</sup>のこと〕に委ね、トルキスタン人の信仰心や民族的な誇りを傷つけた。ロシアのブルジョワジーはトルキスタンから多くの政治的、経済的な利益を得ながら、トルキスタンに文化的、社会的な貢献をすることはなかった。ロシアの高官は文明化の代わりに服従を求め、ムスリムに平伏を強いることもあった。純朴なテュルクやムスリムの間に対立の種をまき、高位を望む保守主義のウラマーやカーディーを優遇して、彼らを進歩主義の民族主義者たちに対抗させたのである。

しかし、それにもかかわらず近年になってトルキスタン人の中には覚醒が起こり、有徳の資産家は自費で新方式学校を開設し、ロシア内地に留学した青年たちはトルキスタンに戻って近代的な学校を開設した。ロシアの学校で世俗の学問や科学を学ぶ者も現れた。1905年の自由〔1905年革命〕以後、トルキスタン人はこの青年党と保守派の二派に分かれ、青年党は人民を啓蒙し、政治的な隷属から解放する活動に着手した。1917年の二月革命はトルキスタン人の新時代を開き、隷属と暗黒からの解放が始まったのである。

これに続いて以下の注が入る：1917年11月28日、コーカンドに開かれたトルキスタン・ムスリム大会で領域的自治が宣言された。しかし自治政府のメンバーには社会主義に反対する考えの持ち主もおり、また一部の保守派の誘導のために自治政府と人民委員政府〔ソヴィエト政権〕との間に齟齬が生じて自治政府は倒され、首都のコーカンドは焦土と化した(1918年1月31日と2月7日の間のこと)。その後、1918年4月30日、トルキスタンは労働者と農民、農業移民の自治共和国と宣言された。自治共和国政府には16名のメンバーが選ばれ、その

<sup>(24)</sup> ルスクロフの構想については [Khalid 2015: 107–116; 小松 2018: 68–80]などを参照。

<sup>(25)</sup> オストロウモフについては [帯谷 2005; Babajanov 2014]を参照。



うち3名はムスリムである。いまやトルキスタンは自由となり、トルキスタン人はテュルクにふさわしい文明国家を作ることに努める。衰退期の父祖たちが犯した歴史的な過ちを繰り返すことなく、統一と連帯によってテュルクの理想に尽くすのだ。ツァーリや大ロシア主義者たちの支配下の50年間に味わった苦痛や屈辱はこれまでとなるにちがいない[Bakir 1918: 42-46]。

以上がロシア統治下の近現代史の概略である。著者はロシアの歴史的な拡大政策とウズベク諸ハン国の不備と弱体、ロシア統治の悪弊とジャディード運動の展開、トルキスタン自治政府の解体と新生の自治共和国への期待にアクセントを置きながら、近現代史の展開を明解に叙述している。こうした解釈の提示においても本書は先覚的であったといえる。注目されるのは、彼が熱烈に支持したトルキスタン自治政府の挫折にもかかわらず、ソヴィエト政権への期待を失っていないことである。たしかに1918年半ば、政治情勢はまだ流動的であり、ムスリム知識人が主体的に活動する余地は残されていた。一方、テュルク・ナショナリストとして帝政支配を厳しく批判しながら1898年のアンディジャン蜂起や1916年反乱には一言もふれていない。前者については同時代のムスリム知識人の多くと同じく、これを無知な一党による暴挙とみなしていたのかもしれないが[小松 2008: 69-71]、後者への沈黙の理由は不明である<sup>(26)</sup>。

**産業と生業** これについては個別に取り上げながら特徴付けを行っている。たとえば農業と園芸(果樹、養蚕、養蜂など)については、フェルガナ州を筆頭に発展する綿作とそれがはらむ問題に注目している。すなわち、トルキスタンでもっとも重要な生業は綿作であり、近年は繊維が長くて白いアメリカ種の生産が増加して毎年2億ルーブルの収益がある。しかし利益の大半は銀行や大企業、代理店、さらに仲買人の懐に入り、汗水垂らして働いた農民が手にする金額はわずかである。また科学、技術的な知見を欠くために、労力に比して収穫は少ない。物価の上昇によって農民の生活は苦しく、年ごとに借金がかさんでゆく。貪欲な仲買人はこれにつけこんで農民に手付金を渡し、綿花の収穫期になると価格を操作して綿花を安く買ったたのである。こうして農民の生活は悲惨なものとなり、しまいには借金のかたとして自分の土地を企業や銀行にとられることになる。鉄道線の不足、稚拙な土地利用、灌漑事業の不備などにより、もっとも有望な綿作の発展は阻害されている、と<sup>(27)</sup>。著者の目は社会経済的な問題にも及んでいたことがわかる。

<sup>(26)</sup> バキルは、戦時労働の供出によって戦後の権利拡大を期し、無謀な反乱に反対したジャディード知識人[宇山 2017: 41; Chokobaeva et al. 2019: 18]に与していた可能性があるが、二月革命後避難先の新疆から帰還したカザフ・クルグズとスラブ系入植者との対立は激化しており、彼もこの現実を目撃していたはずである[Исхаков 2004: 269-274]。

<sup>(27)</sup> フェルガナ地方の綿作について詳しくは[植田 2020]を参照。

もう一つの主な生業、牧畜についてはこう総括している。牧畜はカザフとトルクメンの生業であり、彼らの生活はすべて家畜にかかっているが、近年畜産はしだいに縮小している。とりわけロシア人やウクライナ人移民が遊牧民の住地を奪うと家畜を育む草原も縮小し、移民たちは遊牧民にあらゆる圧迫を加えるようになった。さらにジウト<sup>(28)</sup>の激発も牧畜に打撃を与えた結果、遊牧生活をやめて定住化する動きが起こっている、と。

工業についてはどうか。鉄道が少なく文化的な中心地から遠く離れていること、石炭や石油などの燃料が高価であること、労働者や技術者が育っていないこと、またすべての基礎になる資本と知識を欠いていることから、トルキスタンの工業は未発達である。それでもすべてヨーロッパ式の綿花〔洗浄・綿実油〕工場は多数ある（所有者の多くはムスリムである）。そのほか若干の製粉、製油工場などがある。工業が未発達なのは、上記のほかツァーリ政府やモスクワの工場主・資本家の専制や策動のためである。一方で著者はトルキスタンの地下資源の豊かさを指摘し、今後の鉱工業の発展に期待をかけている。これはもちろん著者が重視する教育の普及と発展と結びつくテーマにほかならない〔Bakir 1918: 46-54〕。

**教育** 教育の水準はひどく低い。マドラサやマクタブは多数あっても教育は旧式で世俗の学問や科学はほとんど教えられることがない。イスラーム諸学にしてもテキストは注釈ばかりで学生の能力を毀損するのみである。かつてイブン・シーナーやファーラービー、イマーム・ブハーリー、ナヴァーイーらを輩出したトルキスタンのマドラサは、いまやワクフを食い物にするムタワッリーやムダッリスの巣窟となりはてた。ロシア統治下でいくつかのロシア語・ムスリム語学校が開かれたが、その目的はロシア化とキリスト教化にあったから、現地民はこれを信用しなかった。ロシアは半世紀にわたってトルキスタンを軍政下に置き、ロシアの一般法とは異なる法制のもとで統治した。しかし最近になって新方式学校が開かれ、イスラームと民族の両面で整った教育が始まった〔Bakir 1918: 54-55〕。教育の惨状に対する批判と新方式学校に象徴される近代教育への期待は、本書の全体を貫く基本的なモチーフと言ってもよい。この実践的な姿勢はテュルク主義の修辞に勝っているようにもみえる。

以上が総論の概要である。次にトルキスタンを構成する5州とブハラ、ヒヴァについてほぼ同一の形式で解説が続く。以下、各章の特徴的な記述を紹介することにしよう。

**シルダリヤ州** 歴史に関してはロシアによる征服過程、トルキスタンは聖者の霊力に守られているかのような迷信、タシュケント攻防戦におけるアーリム・クルの勇戦やブハラ軍のコーカンド侵攻という暴挙を含めてトルキスタン総督府の設立までを詳述する。農業では灌漑事業の不備や蝗害の被害と対処法、ロシア人やドイツ人移民がもたらした新しい農具のほか、

(28) ジウトについて詳しくは〔宇山 2012〕を参照。

食糧の自給ができておらず、穀物はロシアから輸入している事実を解説している。またあらゆる面でトルキスタンの中心であるタシュケントには詳細な説明を加え、新方式学校の教科書の出版や多様な書籍を扱う書店が多いことに言及している [Bakir 1918: 56-78]。

**サマルカンド州** 住民の59%はウズベク、27%がタジクとしながら、原住民で「崩れた *buzuq* ペルシア語」を話すタジクは、文化の面ではトルキスタンの他の民族に勝っていると記す。また、鉄道開通後はアルメニア人が増え、居酒屋などの経営で人々の倫理を破壊していると書くが、これはペフブーデーの有名な戯曲『父殺し』にも現れるテーマである。特記するのは古都サマルカンドの詳細な歴史であり、サーマーン朝の首都としての繁栄とチングス・カンによる破壊に続いてティムール朝期の文化的な繁栄を評価する一方、シャーヒジンダ、グーリ・アミールなどの歴史的な建造物はいずれも破損しており、しかるべき修復を加えなければ消滅のおそれがあることも指摘している [Bakir 1918: 79-90]。

**フェルガナ州** 歴史に関しては、バーブルの遺児アルトゥン・ベシク伝説を含むコーカンド・ハン国の歴史とロシアによる征服過程を詳細に説明し、かつて繁栄したムスリムの独立国家が君主の圧政と無策のためにロシアの軍門に降り、民族的、宗教的な尊厳が踏みにじられた事実を無念の思いもあらわに記している。ちなみにこのモチーフはアブドゥッラ・カーデイリーの有名な歴史小説『過ぎ去りし日々』(1923-24年)に通じる。興味深いのは、トルキスタン自治政府を打倒したソヴィエト政権にあらためて希望をかけていることである。「自由と解放の恩恵を享受するならば、テュルクの祖地 *ojaq* たるトルキスタンが時をへずして文明諸国の仲間入りを果たすことは疑いない」と著者は言う。さらに自治政府崩壊の局面を具体的に描写した著者は、「バスマチ」の指導者として知られるエルガシュ・コルバシュの行動に疑念を隠していない。1918年1月末ポリシェヴィキおよびアルメニア人と時を同じくして「匪賊集団とエルガシュ・コルバシュという反徒がコーカンドを襲い、都市を臨時政府[自治政府]から奪うと自らハンと宣言し、臨時政府のメンバーを捕らえた。その後、ソヴィエト部隊が勝利してコーカンドの新旧両市街を略奪すると、匪賊は群れをなしてマルギラン方面に逃走した」と記すのである。ソ連解体後、民族解放運動の英雄となる小エルガシュであるが [Ражабов 2015: 46-49]、同時代のジャディード知識人は別の目で見えていたことになる<sup>(29)</sup>。なお、著者はパミール西部に住むイスマール派やクルグズ的女領主クルバンジャン・ダドホ(クルマンジャン・ダトカ)にも言及している [Bakir 1918: 91-111]。

<sup>(29)</sup> バスマチに対するバキルの見方は、ハーリドの指摘するムスリム都市民の見方に通じるものである [Khalid 2015: 88]。

**トルクメニスタン** 著者はザカスピ州という公式の名称を使わず、古代からこの地方に居住する民族の名にちなんでトルクメニスタンの名称を用いている<sup>(30)</sup>。同時代のオスマン・トルコ人はモンゴル侵攻期にホラズム地方からアナトリアに移動したトルクメンのカユ・ハンの末裔であることに言及し、アラマン(略奪・人狩りの遠征行)や独立不羈の気質、長老による合議制の伝統のほか、マフトゥムクリの詩やオグズ・ハン伝説の普及などの特徴を述べた後、テケ・トルクメンがロシア軍に対して展開した抵抗戦、とりわけギョクデペの戦い(1881年)におけるトルクメンの勇戦について詳説している。世界一の競走馬と高品質の絨毯を絶賛する著者は、メルヴの転変の歴史を一瞥し、イランから移住してきたパーブ=バハーイー教徒<sup>(31)</sup>と彼らが運営する新式学校にも関心を向けている [Bakir 1918: 111-131]。

**セミレチエ州** 住民としてはカザフとクルグズの他に、中国領内から移住してきたタランチ、ドゥンガン、サルト・カルマクなどを挙げ、シベリア・コサックに始まるロシア人、ウクライナ人の入植については「州のもっとも肥沃で牧畜に適した土地を占有し、村を営んで定着した」と記している。歴史に関しては、ロシア統治に対するケネサルやナウルズバイらのカザフ反乱を詳説し、ケネサルの息子サードック・スルタンを「カザフのバートゥルの中で最強の勇士」と絶賛する。教育についてはカザフの項と同じく、近年テュルク・タタール人の先導で新方式が普及しつつあり、イスラームのほか世俗的な科目が教えられ、民族と宗教の教育がなされている、と高い評価を与えている [Bakir 1918: 131-145]。

**ブハラ・ハン国** この項ではウズベク支配下での文化の停滞と衰退を指摘する一方、盛んな隊商交易に注目する。カザンのテュルク・タタールが4世紀前ロシアに征服されて以来、その民族、宗教的な伝統を保持できたのはこの隊商のお陰であり、タタールの錚々たる改革思想家クルサヴィー(1776-1812)やウトゥズ・イマニー、メルジャーニーらはこの隊商によってブハラに留学した。したがってテュルク・タタールは古の「聖なるブハラ」に恩義があるという指摘は興味深い<sup>(32)</sup>。概して商人気質で計算高く、儉約家のブハラ人が割礼式などのトイでは膨大な出費をいとわず破産に終わるといふ浪費への批判は、ジャディード知識人に共通する論点である。現代史ではロシア革命期に生まれた青年ブハラ人運動を詳説し、1918年3月の革命の挫折を記したうえで、青年ブハラ人はアミールの支配体制との闘争を続けて

<sup>(30)</sup> バキルはトルクメン人が主体のこの地域の独自性を認めていたと推定される。

<sup>(31)</sup> 1910年代半ばからトルキスタンではパーブ=バハーイー教の浸透に対する懸念の声が上がり始め、タシュケントの有力誌『アル・イスラーフ(改革)』は、ウラマーにスンナ・ハナフィー派の一体性を守る言論を呼びかけていたが [Агзамходжаев 2021: 84-92]、バキルにこうした警戒感は見られない。

<sup>(32)</sup> ヴォルガ・ウラル地方とブハラの関係については [小松 1983; Frank 2012; 磯貝 2018] など、「聖なるブハラ」については [木村 2021] を参照。

おり、いつの日か民が覚醒して国の統治を自分たちのものにするだろうと展望している。主な史跡の一つナクシュバンド廟の解説では聖者崇拜への厳しい批判が目立っている。著者は、一般にトルキスタン人の間では死者への敬意が強く、聖者や預言者のマザールが極めて多い。まっとうな仕事につかない怠け者たちは、食い扶持を求めて無知で純朴な人々に「聖者」の墓を「発見」してみせるのだ<sup>(33)</sup>、と記し、もしムハンマドの墓がマディーナになれば、「トルキスタンの各地に預言者様の墓が発見されていたことだろう」と述べている。聖者崇拜の批判もまたジャディード知識人に共通する論点である [Bakir 1918: 145–159]。マドラサの教育・運営実態への批判をはじめ、著者のプハラ評は少し前のタタール人旅行者の観察とほぼ同一と言ってよい [Bigiev 1908; イブラヒム 2013: 14–23; Ross 2020: 157–158]。

**ヒヴァ・ハン国** すべてをアム川の水に依存するヒヴァについて、本来の住民は古代の康居テュルクとイラン系の混成から生まれたホラズム・タジクであり、16世紀にウズベクが到来して現地民を吸収し、その多くはサルトとよばれた。純粹のウズベクはグルレン地方に住み、ヒヴァのサルトはウズベクとタジク、さらにイラン人奴隷の混成から生まれた、と住民の複合性を解説している。一方、ジュナイド・ハン率いるヨムト・トルクメンの略奪や攻撃に言及しながら、素朴で勇敢なトルクメン自体にはテュルク古来の心性を認め、しかるべき教育が与えられればテュルク世界で第一等の民族になろうと記す。著者は教育の劣悪な現状からヒヴァを「死者の世界」と評しているが<sup>(34)</sup>、近年テュルク・タタール人教師が開いた新方式学校に期待をかけ、ヒヴァ人は学問と教育を望み、有能な人々であるから、教育の規律を整えばすみやかに発展することは明らかだと展望する。近現代史では、ロシア革命の影響下でヒヴァの自由主義者たちが革命に決起し、イスファンディヤール・ハンは立憲制を宣言して国民議会が開かれたが、1917年12月の反動によって青年ヒヴァ人は弾圧を受け、亡命したメンバーはトルキスタン自治共和国で革命委員会を組織した、と直近の政治情勢まで記している。そして一時期をヒヴァで過ごした著者は、ハン国の司法、行政、産業、主要な都市についても最新の情報を簡潔にまとめている [Bakir 1918: 159–173]。

## おわりに

1915年2月、ハジ・ムイーンは『アーイナ』に寄せた論説「民族の歴史について」のなかでこう書いていた。

<sup>(33)</sup> これはもちろん事の一面である。聖者の墓の発見に関する歴史的な考察として [濱田 1999] を参照。

<sup>(34)</sup> この表現は、1909年『シューラー』誌上でヒヴァ・ハン国の沈滞を痛烈に批判した論説「生気なき世界」に示唆を受けた可能性がある [Sa'īd 1909]。

民族史についてはわがタタール人の兄弟たちが取り組んで第一歩をしるした。われわれが民族史を知ろうと第一歩を踏み出す時はいまだ来たらずとはいえ、少なくともこの道に進むには準備を整えなければならない。もしわれらトルキスタン人がまさに今日からわれらが民族史の重要性を認め、研究と探求に取り組むならば、やがて立派な著作が現れることだろう。そのときわれわれもはれて自分たちの民族史を初等、中等学校の生徒たちに教えることができるのだ [Hājī Mu‘īn 1915: 258–259]。

それから3年を経て現れたのがバキルの教科書である。ハジ・ムイーンがこれにどのような評価を与えたかは不明だが、イスラーム化以前の歴史を解説し、ティムールにアクセントを置いた本書は、ハジ・ムイーンの期待に応えるものであったと考えられる。あるいは彼の想定を超える斬新なトルキスタン史だったかもしれない。本書の成立の背景にはトルキスタンにおけるジャディード運動の展開、そしてロシア革命のもたらした激変があった。かつての植民地に代わってトルキスタン自治ソヴィエト共和国が生まれていたのである。

以上に紹介したとおり、本書はトルキスタンの地理と歴史を解説した最初の教科書、より正確には教員用の指導書である。全体として情報量は豊かであり、生徒はどこに住んでいようとトルキスタンという広大な地域の現況と歴史を幅広く理解することができるように配慮されている。ここには次世代のトルキスタン人に自立した「祖国」の姿を示そうとする意図が明確にみてとれる。トルキスタンの地理的な領域はたしかにロシア統治がもたらしたものであるが、バキルはこれに「祖国」としての内実を与えようとしているのである。この試みを支えるのはテュルクに象徴される歴史と文化であった。「テュルクの祖地」に表象される歴史観は、東洋学者のバルトリドには容認しがたい「トルコ・ナショナリズム」の見解であったが [Баргольд 1977: 533]、バキルにとってはトルキスタン人を創造するのに不可欠の支柱であった<sup>(35)</sup>。もう一つの重要な要因は、トルキスタンの産業と地下資源のもつ潜在的な可

<sup>(35)</sup> バキルやヤウシェフのように、トルキスタンの変革においてタタール知識人の発揮したイニシアティブは注目に値する。この概観として [Турдыев 1997; Хафизов 2003: 51–78]、また最新の興味深い解釈として [Ross 2020] がある。バキルらタタール人がトルキスタンの教育事業で先導役をはたした理由を考えると、一つにはロシア内地のタタール人は、ムスリムが人口の大半を占めるトルキスタンと異なり、ロシア社会に埋没・同化することなく民族の自立を確保するために、いち早く民族史教育に着手していたことがあげられる。前記のガバシーも民族史の重要性を強調しながら、テュルク・タタール諸民族の過去と現在を概観する初等学校用の教科書『テュルク諸民族』を書いていた。「過去は現在を映す鏡」であり、自らの民族史は誰もが知らねばならないと力説する著者は、スキタイやフン、モンゴルもテュルク・タタールとみなし、その歴史的な覇業を称えている [Gabashi n.d.]。このようなテュルク主義の立場からすれば、トルキスタン人の民族的な覚醒は巨大な人口をもつ同胞の出現を意味したことだろう。じっさいヤウシェフは1917年『ウルグ・トルキスタン』の創刊号でロシアに住む3000万テュルク・タタールの民族的な一体性を説き、トルキスタンをテュルクの祖地と記していた [Khalid 2015: 67–68]。こうしたテュルク主義の衝動も無視することはできない。ただし、近代教育の普及は、地域によって時間差はあれ普遍的な現象であり、特定のイデオロギーとのみ関係づけるのは正しくないだろう。

能性である。彼は現在の不備や欠陥を指摘しながらも将来の発展を展望してみせる。そしてそれを支えるのが、新方式学校に象徴される教育改革であった。こうしてみると、本書はジャデード知識人の理念を具現化した教科書と言ってよいだろう。それが革命のただ中で書かれたことも特記に値する。トルキスタンの通史は現下の革命まで書き継がれているのである<sup>(36)</sup>。周知のとおり、ソヴィエト体制の確立とともにジャデード知識人の活動の場は失われてゆく。この教科書が前記の人民大学で使われた可能性は高いが、実際に使用された期間は長くはなかつたろう。トルキスタンという枠組み自体も1924年には消滅する。しかし、この時代の思潮を物語る史料として、本書には独自の価値を見いだすことができる。近年ジャデード運動の過大な評価や研究手法には厳しい批判が出されている [Eden et al. 2016]。たしかにその相対化は必要だが、研究の停止まで求めるのは極論ではないだろうか [DeWeese 2016: 41]。研究の深化は史料の吟味によってはじめて可能になるはずである。

## 参考文献

- Allworth, Edward. 1990. *The Modern Uzbeks: From the Fourteenth Century to the Present, A Cultural History*, Stanford: Hoover Institution Press.
- Babajanov, Bakhtiyar. 2014. “How Will We Appear in the Eyes of *Inovertsy* and *Inorodtsy*?” Nikolai Ostroumov on the Image and Function of Russian Power,” *Central Asian Survey* 33(2), pp. 270–288.
- Bakir, Mukhtār. 1913. “Millat namīna bir rijā,” *Shūrā* 4 (1913.2.154), p. 122.
- . 1918. *Turkistān qit’asi ta’rikhī va joghrafi jihatdan*, Tashkent: Birādarān-i K. M. Bakiroflar va Kompaniyasi Tijāratkhānasi.
- Behbūdī, Maḥmūd Khvāja. 1914. “Turkistān ta’rikhī kerak,” *Āyina* 38 (1914.7.12), pp. 898–890.
- Bigiev, Muhammad Zāhir. 1908. *Mā warā al-nahrda siyāhat*, Kazan: Kitāb.
- Brophy, David. 2016. *Uyghur Nation: Reform and Revolution on the Russia-China Frontier*, Cambridge-London: Harvard University Press.
- Chokobaeva, Aminat, Cloé Drieu and Alexander Morrison eds. 2019. *The Central Asian Revolt of 1916: A Collapsing Empire in the Age of War and Revolution*, Manchester: Manchester University Press.
- DeWeese, Devin. 2016. “It Was a Dark and Stagnant Night (‘Til the Jadids Brought the Light): Clichés, Biases, and False Dichotomies in the Intellectual History of Central Asia),” *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 59, pp. 37–92.
- Eden, Jeff, Paolo Sartori, Devin DeWeese. 2016. “Moving beyond Modernism: Rethinking Cultural Change in Muslim Eurasia (19th–20th Centuries),” *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 59, pp. 1–36.

<sup>(36)</sup> ちなみにバルトリドによる最初のトルキスタン通史の刊行は1922年のことである [Бартольд 1963: 107–166]。

- Farkhshatov, Marsil N. and Isogai Masumi eds. 2020. “*My Autobiography*” by Ḥasan ‘Aṭā’ Gabashī in 1928: ‘*Ulamā*’ and Soviet Power, Tokyo: ILCAA.
- Frank, Allen J. 2012. *Bukhara and the Muslims of Russia: Sufism, Education, and the Paradox of Islamic Prestige*. Leiden-Boston: Brill.
- Gabashī, Ḥasan ‘Aṭā’. n.d. *Türk urughlari*, Kazan: Lito-tipografiya I. N. Kharitonova.
- Hājī Mu‘īn Shukr Allāh. 1913. “Turkistānning ogut ham otinchi,” *Shūrā* 1 (1913.1.1), p. 10.
- 1915. “Millī ta’rīkh haqqında,” *Āyina* 10 (1915.2.28), pp. 258–260.
- Khalid, Adeeb. 1998. *The Politics of Muslim Cultural Reform: Jadidism in Central Asia*, Berkeley-London: University of California Press.
- 2004. “Nation into History: The Origins of National Historiography in Central Asia,” S. A. Dudoignon ed., *Devout Societies vs. Impious States?: Transmitting Islamic Learning in Russia, Central Asia and China, through the Twentieth Century*, Berlin: Klaus Schwarz Verlag, pp. 127–145.
- 2015. *Making Uzbekistan: Nation, Empire, and Revolution in the Early USSR*, Ithaca-London: Cornell University Press.
- Ramaḍān, ‘Alemdār Mullā. 1914. “Khīva tamadden yolunda,” *Vaqt* 1447 (1914.3.23), p. 2.
- Ross, Danielle. 2020. *Tatar Empire: Kazan’s Muslims and the Making of Imperial Russia*, Bloomington: Indiana University Press.
- Sa’īd, ‘Abd al-Karīm. 1909. “Rūhsiz ‘ālam,” *Shūrā* 18 (1909.9.15), pp. 549–551; 19 (1909.10.1), pp. 583–585; 20 (1909.10.15), pp.616–618; 24 (1909.12.15), pp. 748–749.
- Sela, Ron. 2011. *The Legendary Biographies of Tamerlane: Islam and Heroic Apocrypha in Central Asia*, Cambridge University Press.
- Sheref, Burhān. 1913. *Ganī Bāy: Terjume-i hāli, mektūblari ve onun haqqında khāṭīralar*, Orenburg: Vaqt matbaasi.
- Togan, A. Zaki Velidi. 1942–47. *Bugünkü Türkili (Türkistan) ve Yakın Tarihi*, İstanbul: Arkadaş, İbrahim Horoz ve Güven Basimevleri.
- 1969. *Hâtıralar: Türkistan ve Diğer Müslüman Türklerinin Millî Varlık ve Kültür Mücadeleleri*, İstanbul: Tan Matbaası.
- ‘Uthmānī. 1912. “Khīva mamlakatinde madrasalari,” *Shūrā* 18 (1912.9.15), pp. 559–561.
- Yāvshēv, Nūshīrvān. 1914. “Turkistān ta’rīkhī,” *Ṣadā-i Turkistān* 17 (1914.6.10), pp. 1–2.
- Агзамходжаев, С., З. Улугбекова. 2021. “*Ал-ислоҳ*” журналі: Туркистондаги ислоҳотчилик ҳаракатини ўрганиш бўйича тарихий манба (1915–1918 йиллар), Тошкент: Ўзбекистон халқаро ислом академияси.
- Бабаджанов, Бахтияр М. 2010. *Кокандское ханство: власть, политика, религия*, Токио-Ташкент: TIAS.
- Бартольд, В.В. 1963. История Туркестана (конспект лекций), *Сочинения*, 2-1, Москва: Наука, pp. 107–



166. [初出は1922年、邦訳としてウェ・バルトリド(長沢和俊訳)『中央アジア史概説』角川文庫、1966年]
- 1977. Задачи русского востоковедения в Туркестане, *Сочинения*, 9, Москва: Наука, pp. 522–533. [初出は1914年]
- Исхаков, Салават. 2004. *Российские мусульмане и революция (весна 1917 г. – лето 1918 г.)*, Москва: Издательство <Социально-политическая мысль>.
- сост. 2019. *Великая российская революция 1917 года и мусульманское движение: сборник документов и материалов*, Москва - Санкт Петербург: Центр гуманитарных инициатив.
- Мадьярова, С. Н. 2014. Туркистон ўтмиши ва келажаги Мухтар Бакир асарларида, Д. А. Олимова, ред., *История и историки Узбекистана в XX веке*, Ташкент: Издательство “Navro’z,” pp. 43–51.
- Мунаввар Қори Абдурашидхонов. 2001. *Хотираларимдан*, Тошкент: Шарқ.
- Ражабов, Қахрамон. 2015. *Фаргона водийсидаги истиқлолчилик ҳаракати: моҳияти ва асосий ривожланиш босқичлари*, Тошкент: Yangi Nashr.
- Турдыев, Шерали. 1997. Среднеазиатские татары: роль и значение в культурной и политической жизни Туркестана первой четверти XX в., Рафаэль Хакимов. ред., *Ислам в татарском мире*, Казань: Панорама-Форум, pp. 169–190.
- Хафизов, Г. Г. 2003. *Культуртриггерская деятельность Татарской интеллигенции в XIX – первой четверти XX вв.*, Казань: Изд-во Казанского университета.
- Холбоев, Сотимжон. 2003. *Миллий университетнинг тарихий илдиэлари ва ташиқил топиши*, Тошкент: Шарқ.
- 磯貝真澄 2014 「ロシア帝国ヴォルガ・ウラル地域ムスリム社会の「新方式」の教育課程」秋葉淳・橋本伸也編『近代・イスラームの教育社会史——オスマン帝国からの展望——』昭和堂、194–216頁。
- 2018 「ロシアのウラマーとイスラーム教育網に関する試論——19世紀前半まで——」『史林』101(1)、116–149頁。
- イブラヒム, アブデュルレシト 2013 『ジャポニヤ——イブラヒムの明治日本探訪記——』小松香織・小松久男訳、岩波書店。
- 植田暁 2020 『近代中央アジアの綿花栽培と遊牧民——GISによるフェルガナ経済史——』北海道大学出版会。
- 宇山智彦 2012 「カザフスタンにおけるジェト(家畜大量死)——文献史料と気象データ(19世紀中葉–1920年代)——」窪田順平監修・奈良間千之編『中央ユーラシア環境史1 環境変動と人間』臨川書店、240–258頁。
- 2017 「ロシア・ムスリムの革命と「反革命」——「想像の帝国」との協力と闘い——」宇山智彦[責任編集]『ロシア革命とソ連の世紀5 越境する民族』岩波書店、37–64頁。

- 大石真一郎 1998 「ヌーシルヴァーン・ヤウシェフのトルキスタン周遊について」『神戸大学史学年報』13、20-36頁。
- 帯谷知可 2005 「オストロウモフの見たロシア領トルキスタン」『ロシア史研究』76、15-27頁。  
—— 2022 『ヴェールのなかのモダニティ——ポスト社会主義国ウズベキスタンの経験——』東京大学出版会。
- 木村暁 2021 「スンナ派学の牙城ブハラ」守川知子編『都市からひもとく西アジア——歴史・社会・文化——』勉誠出版、168-185頁。  
—— 2022 「繁栄する青の都——ティムール朝から現代まで——」『K』3、28-35頁。
- 小松久男 1983 「ブハラとカザン」護雅夫編『内陸アジア・西アジアの社会と文化』山川出版社、481-500頁。  
—— 1996 『革命の中央アジア——あるジャディードの軌跡——』東京大学出版会。  
—— 2008 「聖戦から自治構想へ——ダール・アル・イスラームとしてのロシア領トルキスタン——」『西南アジア研究』69、59-91頁。  
—— 2018 『近代中央アジアの群像——革命の世代の軌跡——』山川出版社。  
—— 2022 「サルト人はいるか——近代トルキスタンにおける民族名論争——」『西南アジア研究』94、59-92頁。
- 佐々木紳 2008 「メフメト・エミン・エフェンディの『中央アジア紀行』について——概要と史料的价值——」『内陸アジア史研究』23、153-163頁。
- 濱田正美 1999 「聖者の墓を見つける話」『国立民族学博物館研究報告別冊』20、287-326頁。

(公益財団法人東洋文庫研究員)